仕事が終り家に帰ると、家に入るより先に庭の盆栽のもとへ。そこではじめて安心するという宮崎さん

随筆

我が"盆栽づくり"

四山指導部　宮崎　勝

私の趣味は盆栽と釣りですけれども、とくに盆栽の方ははじめて約十五年になります。その前は、菊づくりを楽しんだものです。

ところが友人のおやじさんから盆栽を見せていただき、菊の優雅さから、老松の古風の美にとりつかれ、盆栽をはじめるようになった次第です。

しかしながら、いまだこれといった盆栽はありません。なぜなら植木屋さんや店舗から求める金がありませんし、ほとんどが山から採取したものばかりで、あと十年もたてばどうにか見られるようになると思います。

盆栽に対する愛情は、買ったものより山から採取したものがより深いものがあります。先輩がたくさんいられるなかで、盆栽について語ることは大変恐縮ですが、十五年前頃でもこれといった松の材木はなく、立ち上がりの悪い木や片根など根はりも悪く、そんなものを簡単に変えられるものではありません。

しかしそういうものでも、どこかに良さを備えているもので、その良さをどう発見するかが大切だと思います。

店から買ったものは姿ができあがっているのでつくる楽しみはありませんが、山から採取したものはどのようにつくり上げるかを頭に描きながら、永い年月をかけ、先輩から教えていただいたり、本を読んだりいろいろ苦労しながら一歩一歩、描いている形に近づけていく、という楽しみ、それには永い年月をかけて育てたものは姿は悪くても、大変愛情がわくものであります。

私は三池の調査団の一員として北海道に約一カ月行ったことがありますが、それはそれは家の盆栽が心配で、わが家にだす便り書きが大変でした。いまも忘れませんが、約二十通は書いたと思います。

「いま、北海道は雪ばかりだ。俺は元気にやっているが、盆栽は元気かい。水やりはたのむよ」

そんな内容でしたが帰ってからが大変で、たじたじでした。女房いわく。

「お父さんの便りは盆栽のことばかりで、子どものことや私のことなどぜんぜん心配してないね。家族と盆栽のどちらが大切ですか」

家族も盆栽も大切なことでは同じですが、盆栽というものはそれほど可愛いものであり、またそれだけの愛情がなければ、育たないと思います。

旅行などから帰ったときなども、「ただいま」と声をかけるより先に裏庭の盆栽を見に行き、それからでないと家にはいらない、といった調子です。その気持がわかってか、盆栽の方も水をもらったからもらわなかったかは必ずいってくれるので、女房や子どもがウソをついてもすぐにバレることとなります。

しかし今日は、私の党や組合の仕事がいそがしく、盆栽に少々辛抱してもらっていますが、日常はともかく大風のときなどいまでは女房が世話をしてくれるので助かっています。つまり、家族ぐるみでないと、盆栽づくりもできない、ということです。

釣りにしましても盆栽にしましても、大切なことは経験主義だけではできないものだ、ということです。一生懸命にやればやるほど、基本的な理論が必要であり、愛情の打ち込まれた実践と、長期計画と、展望がなければならないと思います。まさに労働運動や社会主義運動と同じだな、とつくづく考えさせられます。

それに恐ろしい公害を、たれよりも早く感知してくれるし、反公害の先頭に立っている慨さえあります。

最後になりましたが、これからも諸先輩のご指導をよろしくお願いするとともに、三池労組の階級運動の強化と全労働者の闘いのため頑張りたいと思います。

同時に、CO・遺族協定の充実をめざすたたかいの準備もすすめなければならず、年明けとともに新しい年のたたかいの足どりが開始する。

そのためにも健康であること。次は連合通信記事による、健康管理上の心得――「人間の体にはサーカディアンリズム、とよばれる一日単位のリズムがあります。体温、心ぱく、血圧などの生理機能は昼は高進し、夜は低下します。このリズムがこわされると、疲れがひどくなります。年末、年始は飲み過ぎ、遊び過ぎ、運動不足などでリズムがこわれがち。一日も早く疲れをとり、リズムを取りもどすようにしましょう」。

一月の暦

1日　元旦。
2日　初荷。初夢。書き初め。
4日　官庁御用始め。特定休日。
5日　小寒。
7日　七草（ななくさ）。
11日　かがみ開き。
15日　成人の日。
17日　土用。
20日　大寒。

×

一月は、二月からたたかいに立ちあがる、北七春闘の前段闘争ともいうべき福利・厚生闘争のための要求とりまとめが、さし迫ったものとなる。

荒尾地方の子守唄

投稿　伊藤　隆造

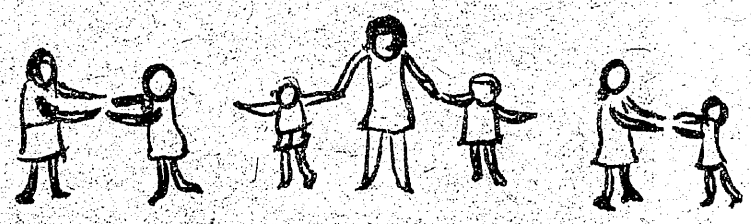
おろろんおろろんおろろんばい
この子の親たち　心労じゃ
欲張り　無理すな　ケガするぞう
保安がおろおろ　気がかりたい
おろろんおろろんおろろんばい

おろろんおろろんおろろんばい
五体もまんぞく　強なれよう
おたからまんちん　大なれよう
きつかろばってん　早よ起て　さあ
おろろんおろろんおろろんばい

おろろんおろろんおろろんばい
泣くじかなかい　三池坑さん
よう寝て　よう食て　頼れんばい
手と手ば　がっちりつなごよなあ
おろろんおろろんおろろんばい

おろろんおろろんおろろんばい
しぼられ通しで　たまらんばい
ひ弱かからだは　よれよれたい
三井の　三川の　CO・COたい
おろろんおろろんおろろんばい

おろろんおろろんおろろんばい
おりげん柱は　組合ばい
いじけず　とことんガマ出そなあ
この子のためにも　ガンバロたい
おろろんおろろんおろろんばい



【解説】　この作品は、『西日本歌謡』十月号に発表されたもので、作者（荒尾市古庄原在住、六十七歳）の了解をえて転載させていただきました。作者は、戦前から北原白秋に師事し、歌謡詞などの創作を手がけられ、今日も短歌、詩などに取り組んでおられます。作品の「おろろん……」といえば「五木の子守唄」を連想しますが、これとは直接に関係なく、むしろ白秋の「ほろろん　ほろろん　ほおほろろん」の記憶につながるものです。氏は、多方面にわたる資料を蒐集されていますが、とりわけ三川鉱炭じん爆発とその犠牲者に深い理解と同情を寄せられ、この作品となったものです。まんちん＝おりこうさん。おりげん＝わが家の。ガマ出そ＝精出そう、の方言です。**杉本一男**

発見

近くの外科医院に行ったときのことです。名前を呼ばれて診察室にはいると、薬のにおいにまじって先生と患者さんの話し声。何気なく聞いていました。

患者さんは、としの頃六十五歳くらいのおじいさんです。診察が終ったらしく服を着ながら「先生としをとるとどこでも痛くなって、良かとこなかばい。とし寄りは、早よう死んだがよかばい」

外の患者を診察しながら、先生の声。

「何ばいうな。まだまだ大丈夫」

するとおじいさん――「先生病院にも棺桶ば一つくらいおいとかんならできんばい」

先生――「そらー、おいとっとるばってん、今日は朝からっとるばってん、なかなか治らんたい」

先生――「あっちの方（アルコールのこと）ばやめんなら、薬はきかんたい」

おじいさん――「それはわかたっちゃよかばってん、葬儀屋さんに悪かけん。そっちの方にいってもらわんならこまるたい」

おじいさん――「だいぶん薬と注射ばしてもらいよるばってん、なかなか治らんたい」

先生のひとりごと。

私は、二人の話を聞いていて考えさせられました。

ああいって帰っていきましたが、その後おじいさんはどうしているのでしょうか。

自分自身の老後を思うとき、あんなやけくそ見たいなことをいったおじいさんの気持がわかるような気がします。

本当は、淋しいのかも知れません。いつかもう一度お会いしたら、ゆっくり話し合って見たい思いでいます。

×

この欄に、三池主婦会々員の皆さんにもっと積極的なご投稿をお願いいたします。**編集部**

或る対話から

港務支部　森田　勝子

飲んだもんな。飲むと痛かつの止まるけん、酒はやめられんたい」少し酔った足をふらつかせて、診察室からでていきました。「自分で体を大事にせんなら。あんな患者が一番困る」と

新春作品集

宮浦指導部　平田　光男

詩　完闘式

駛馬南校区運協の
細谷選対の完闘式
日頃
細目で
底音の
議長が
目を丸くし
声にはハリがあり
全員に経過報告する
主婦の目も
組合員の目も
負けじと
笑顔が自然と現われ
よろこびがにじみ出る

一人の男が立ち上がり
俺の親族は別な組織じゃん
だから俺達が推せんした人を
どう考えているか
心配してたんだ
ところが
やっぱりお前がいいおった人ば
投票したばい

この話を近くで
聞いていた皆んなは
一瞬しんとした
そしていいようのない
力が
静かに皆んなの体の中に
広がって行った

短歌

あくらつな手に弄弄されて十七年恨みも深き霜の朝

有明の海苔も腐れ行く汐うすき
岩塩まかずとも良き策は

俳句

正月をやはり二人でご苦労さん
瓢単に御神酒を入れて門松も